

SAPIENTIA

vol.95

「在りし日を偲んで」

アウグスティヌス 岸英司 神父 追悼の号

IN MEMORIAM

REVM AC ILLMI D. AVGSTINI KISHI HIDESHI

DEVS QVI VIVIS ANTE SAECVLA VITAEQVE FONDS ES VNICVS,
HOC VITAE REGNO PERFRVI PRAESTA FAMVLVM TVVM D. **KISHI HIDESHI** QVI PRESBYTER IN
ECCLESIA OSAKENSE FIDELITER MINISTRAVIT ATQVE IN VNIVERSITATE STVDIORVM
SAPIENTIA EVANGELIVM TVVM VALDE NVNTIAVIT.

GRATIAS AGIMVS TIBI, DOMINE, QVIA HVMANI INGENII PRECLARVM
CVLTOREM NOBIS DARE DIGNATVS ES.
D. **KISHI** INGENIVM SVVM PER ANNOS IMPIGRE EXERCENDO IN SCIENTIA PHILOSOPHICA
AC THEOLOGICA SANE PROFECIT.
NOSTRIS TEMPORIBVS IN MVNDO MATERIALI PRAESERTIM INVESTIGANDO ET SIBI
SVBIICENDO, EGREGIOS OBTINUIT HOMO SVCESSVS.
SEMPER TAMEN D. **KISHI** PROFVNDIOREM VERITATEM QVAESIVIT ET INVENIT.
INTELLIGENTIA ENIM NON AD SOLA PHAENOMENA COARCTATVR, SED REALITATEM
INTELLIGIBILEM CVM VERA CERTITVDINE ADIPISCI VALET, ETIAMS I, EX SEQVELA PECCATI,
EX PARTE OBSCVRATVR ET DEBILITATVR.
HVMANAE TANDEM PERSONAE INTELLECTVALIS NATVRA PER SAPIENTIAM PERFICITVR ET
PERFICIENDA EST, QVAE MENTEM HOMINIS AD VERA BONAQVE INQVIRENDA AC
DILIGENDA SVAVITER ATTRAHIT, ET QVA IMBVTVS HOMO PER VISIBILIA AD INVISIBILIA
ADDVCITVR.

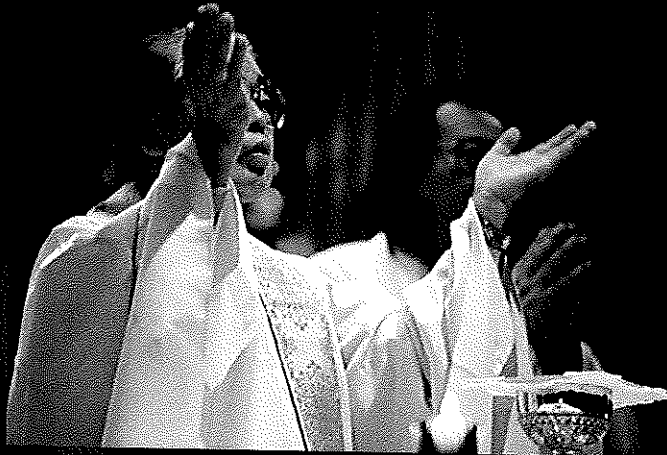
INCLINA, DOMINE, AVREAM TVAM AD PRECES NOSTRAS,
QVIBVS MISERICORDIAM TVAM SVPLICES DEPRECAMVR,
VT FAMVLVM TVVM **KISHI HIDESHI**, QVEM IN HOC SAECVLO
TVO POPVLO MISERICORDITER AGGREGASTI, IN PACIS AC LVCIS
REGIONE CONSTITVAS, ET SANCTORVM TVORVM CONCEDAS ESSE
CONSORTEM.

NOS BENEDICITE PATER CAELESTIS VT, D. **KISHI** EXEMPO CONFORTATI, GRAVISSIMVM
EDVCATIONIS MANDATVM PERFICERE POSSVMVS. AMEN.

A. Bonazzi
Religionum Scientiae Decanus
dedicavit

XVI IVN. MMVI

アウグスチヌス 岸 英司 神父(名誉教授)は、5月25日午後10時49分、心不全のため箕面市のガラシア病院にて静かに天に召された。1927年香川県生まれ。61年司祭叙階。59年から63年までカナダ・モントリオール大学に留学した。神学博士。帰国後は大司教秘書兼副事務局長を務め、69年から79年まで英知大学・短期大学学長を務めた。77年には園田教会小教区管理者となり、79年からは夙川、芦屋、宝塚の各教会で宣教司牧。97年から2002年まで英知大学学長を再度歴任するなど重責をこなした。博学で他宗教に精通し、エキュメニズム(教会一致運動)担当、諸宗教間対話推進などにも貢献した。得意の料理で来客をもてなしたり、知人を訪問する時も手作りサンドイッチや弁当を持参するなどの一面もあった。



永遠なる神が歴史の中に現れ、
受肉したことによって、
時の流れである一瞬一瞬は永遠
を帯びる。

「永遠の今」。

時はここにその存在の究極的根
拠を見いだすのである。

『時の流れのなかで』岸 英司 著より抜粋

Rev.Kishi, Augustin Hideshi.

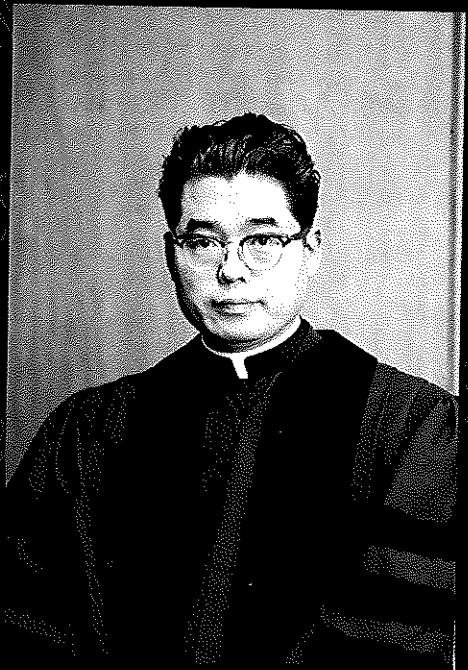
人間はこの世界に、
ある時に生まれてきて、
そしてある時に死んでゆく。

人間はだれ一人として自分の生まれる時を知っている
わけではなく、
生まれてきてから、
後になって生まれた時のことを知る。

また、みずからの死の時を知るといっても、知るこ
とはきわめて困難であって、
ある特別の場合にのみ、
近づいてくる死の時を予知しうるのみである。

このように考えると、
人間はみずからの生まれる時も死ぬときも知らないとい
言わなければならない。
生まれることも死ぬこともある変化である。

この世界では人間のみならず、
すべてのものは移り変わるものであって、
古来「万物流転」と言われてきたことは、
人生における一つの悟りである。



『神思想とトマス・アクィナス』岸 英司 著より抜粋

傘木澄男 英知大学元学長



元英知大学学長・名誉教授岸英司神父様のご逝去に際し、謹んで哀悼の意を表します。

私は年齢も経歴も師の二年後輩で、英知大学の学長職にも、その後勤めた教会の主任司祭にも共に師のあとを継いで就任しました。そのため師が大学においても教会でも、行く所すべてで素晴らしい実績を挙げ、大きな足跡を残されたのを直に見てきました。こうして私は師から貴重なことを数多く教えられ、また学ばせて頂いて今日に到りました。英知大学のために師がなされたことがいかに大きなものであったかは、皆様既にご存知のことで、私が付言するまでもありません。師の秘訣は、私のような臆病な者には追従の出来ない大胆な発想と旺盛な実行力でした。ですからその時は見ていてお考えや方法に心配になることがありましたが、今思えば師がそのようにして敷かれた道によって英知大学はその後力強く発展することができたのです。その意味で師は英知大学に与えられたカリスマ的存在でした。学園の播種期から長い年月を共にしてきた私には、施設や建物の一つ一つが思い出の種となり、師は今もこの学園に留まり、死を越えて永く大学を支えて行って下さるだろうと感じさせます。師は生涯のご功績の故に今天国で大きな報いを受けておられることでしょう。岸英司神父様の願いに応じて英知大学の今後益々の発展のために努めて、師への恩返しをしたいと思えます。神父様の御霊の御永福を心よりお祈りいたします。

岸名誉教授を悼んで

井上博嗣 英知大学元学長

日頃からご自分の健康管理に細心の注意を払っておられたはずの岸先生がどうして病床にふする身となられ、ご帰天なされたのか、今でも不思議に思われなりません。「神は与え、かつ神は奪いたもう。神のみ名は賛美されよかし」と旧約のヨブは申しましたが、神は教会と英知大学に大切なお方をお与えになってくださいました。

1969年から79年までと、97年から2002年までの二期にわたって学長としての重責を担い、大学の維持、経営、さらなる発展のために全身全霊をあげて尽くしてこられました。また長きにわたり常務理事としてすぐれたリーダーシップを発揮して来られました。そのかたわら授業を受け持ち、矢継ぎ早に論文を執筆、さまざまな学会で研究発表をなさって来られたあのエネルギーは、神からの特別な賜物であるというほかはありません。学内でのさまざまな改革が行われるたびごとに必要な書類を整えて文部科学省へ出掛けては、達成困難とさえ思われる指示を仰ぎ、それを着々と実現すべく誠心誠意を尽くされた故人に敬意を表明せざるにはおられません。

岸先生、ほんとうにお疲れさまでした。生涯信仰によってお仕えになられた慈しみ深い神のみもとで安らかにお憩いください。



アウグスチヌス 岸英司神父先生のご逝去に当たって

中野正勝 英知大学元学長



英知大学の初期から長きに亘って常務理事、学長、教授、カトリック大阪大司教区司祭として貢献してこられた岸英司先生のご功績に心からの敬意と感謝を申し述べたいと存じます。亡き先生は、この四つの職責を見事に果たしてられました。現在の1号館の東半分の校舎から始まった英知大学の、今日の素晴らしい姿は、岸先生の働きなくしてあり得ないでしょう。私の学長時代には学生数も1600~1800人で、毎年の入学者も470名を数えるほど。入学試験のために隣の百合学院の校舎をお借りしたほどでした。国際文化学科が開設された中で、更に大学院の創設に意欲を燃やされ、有能な教授陣を整えられただけでなく、キャンパスの整備やサピエンチアタワーの建設、そして、留学生を受け入れ、またフランスや中国にも目を向けて、姉妹校提携を目指しておられました。その根本には、創立者田口芳五郎枢機卿様が「英知大学をよろしく頼むよ」と言われたことだと仰ってました。ご馳走を好まれ、私の学長就任の時には好きだったカトリック芦屋教会の主任司祭でしたので、司祭館の食堂に招いて、手作りの実に美味しいピフテキをご馳走してくださいました。結構、はつきりものを仰いましたが、不思議に憎めないお方でした。死に至る病となってしまって入院なさったときには、阪大病院に、そしてまったく偶然にガラシア病院で、亡くなる前日の午後にお見舞いをしました。「神父様、お大事に！」と申しましたら、頷かれたのが最後でした。私は今、カトリック芦屋教会の主任司祭をしながら、英知大学に奉職させて頂いております。岸神父様、どうぞ亡き創立者とともに、神様のもとで、安らかにお休み下さい。

歴大なる人格を偲んで

山田利秋 英知大学前学長



岸英司先生は笑う人であった。語り口は、常に物静かであったが、時折、呵呵大笑された。自然でこだわりのない、品の良い明るい笑いだった。

長年、英知大学という日本社会では特殊な組織を運営することは、先生にとって並大抵の苦勞でなく、周囲の評価もさまざまであったが、いつも肚を据えて決断実行し、少々の批判は、文字通り笑い飛ばされた。

表現は一貫して直截簡明、喜怒哀楽を正直に示され、型にはまった人物の多い当節の学者・教授・聖職者のなかで、まさに異色の存在であった。あえて言えば、先生は、押しも押されぬ人間であり、洒々落々たる一つの奥深い人格であった。

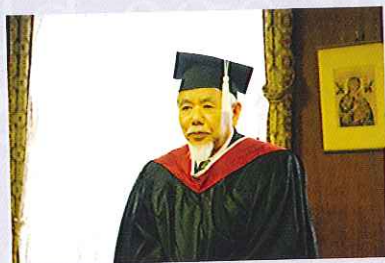
先生はカトリック司祭でありながら禅の道をも究められ、禅家の基本姿勢である「本来無一物」を、しばしば私に説かれた。本来ないものなら、いくらあってもよいという、執着即無執着の姿勢を体現しておられたのは、まことに美事としか言い様がない。

その風格は、中国の姉妹校、蘇州科技学院の院長をはじめとする教授たちに深い感銘を与え、卓越した存在感故に、先生を尊敬し、敬愛していた。

カテドラルでの葬儀の折に、岸先生と並ぶ人格と学識を備えておられる一人の教授が、ただ一言、「惜しい人を失くしました」と、私に言われたことに全てはつきていると言える。つたない多弁を恥じ、後は黙して祈るのみである。

岸英司名誉教授の御逝去を悼む

今道友信 名誉教授



大学が学問の府であることは大学の本質的アイデンティティとして他の組織とは区別されるところである。したがって、そこで教員であるということは真理の学問的探求を使命とする学者であらねばならない。岸英司教授は宗教学における日本の代表的な学者として学界において夙に令名が高かったが、特に正確な判断力と該博な知識を必要とする比較宗教学においては、本邦屈指の学者として著述によりまた関係諸学会の指導者の一人として活躍されたことは、われら英知大学に縁ある者の誇りとし範となすべきところである。

殊に1966年にフランス語版、98年に日本語版が出版された『禅思想とトマス・アキナス』はキリスト教的観想の自己抑制と禅の直観の非限定要求の対立提示(178頁)が見事で、神学界ではアンリ・ド・リュバック神父、仏教学界では西村恵信師から比較研究の模範として高く評価された。宗教学論文集の出版を前にしての死は残念でならぬ。

教区が大学をもつことはカトリック教土着の為に必要である。岸神父は常務理事、再度も学長を勤め、その間教職員に優秀な人材を集め、聖堂をもつ図書館、ガラス張りの談話館、日に輝く知のタワーを建て、キリスト教文化研究所、国際文化学科、大学院を創設し、その東京サテライトも設け、講義を続け、教区司祭として司牧も続けた希有の人であった。



岸英司神父様ご逝去の意味

和田幹男 名誉教授

岸英司神父様は、2006年5月25日(木)、永眠されました。原発性アミロイドーシスという難病のためでした。神父様は、1961年に司祭叙階、1963年に学位論文を完成し帰国、それ以来英知大学創業者山口芳五郎枢機卿が最も信頼する協力者として、学長と常務理事を勤め、創業者の教育理念を実現するため貢献してこられました。

創業者は、日本司教団の中でも指導的な司教であり、カトリック精神とは何か、学問研究とはいかなるものか、類稀な知見の持ち主でした。建学の精神もその心の中の理念から出てきたものです。その最も良き理解者であった神父様が逝かれた今、創業者の遠大な計画も挫折の危機にあるように思われます。

建学の精神を担う学科として神学科がありましたが、神父様はその学科の教授として論文の執筆活動、学会での発表を活発に行われました。その神学科の実質的廃止を最も悲しんだのが、神父様でした。神学科なしに、建学の精神であるカトリック精神も、英知、つまりキリスト教的サピエンチア、聖書のソフィアの教育理念も、どうして追い求めることができましょうか。神父様のご逝去にあたって、英知大学のアイデンティティの危機をあらためて痛感しました。

ピンチはチャンスですから、この際建学の精神を原点に戻って問い直したいものです。



美事な生き方

大沼雅彦 教授

対等な発言権をもっている個人がいく人か集まると、たしかに、悪いことはできにくくなる。しかし、よいことは、もっとできにくくなる。そして最善のことなど、とてもできないことになってしまう。先生が大学の中枢を去られて、もっとも強く感じたのは、このことであった。先生の叡智が、英知大

学を英知大学たらしめていた時代があったのである。

比較宗教学者としての、そして、宗教家としての、先生の偉大さについては、ここで特筆するまでもないことである。私は、そこで、英知のキャンパスで先生と接することのあったこの10年という短い期間に、もっとも感銘を受けたひとつのことだけを記しておくことにしたい。それは、いわゆる煩惱から完全に超越し、傷心といったものともまったく無縁であった先生の生き方である。先生は、少なくとも私に対しては、常にそのような態度をおとりになっていた。これは、特に、身近の者から薑桂の性といわれ、嗤われてお(り、そして、それをみずからも自覚している者にとっては、何にもまして、まなびとらせていただかねばならぬ特目であった。

生き方の或る面を、ひそかにまなばせていただいていた得がたい先達が、また、ひとり、往ってしまわれた。

岸神父さま

木鎌安雄 名誉教授

神父さまは、なによりも司祭でありました。大阪教区の運営と、そしていくつかの小教区での司牧と宣教にあたられました。小教区の主任司祭として、祈りと活動を大切にしていました。次に、神父さまは、英知大学の創立にかかわり、その後の大学運営に直接かかわってまいりました。英知大学をこよなく愛しておりました。第三に、神父さまは、教育者でありました。英知大学だけではなく、他大学やいろいろな公開講座やラジオなどのメディアで、一般の人びともキリストを教えられました。第四に、神父さまは、研究者でありました。多くの著作、学会誌への研究論文、学会での研究発表、専門事典での解説など、数えきれません。カンタベリーのアンセルムスの言葉を借りれば、神父さまのご研究は、「知解を求める信仰」でした。



神父さまの司祭職、大学運営者、教育者、研究者という四つのお姿は、信仰によって一致していました。

神父さまは、人間の良心と知性の根源を形成している善、真理、存在に深い理解を持っておりました。主観的な望みではなく、真理と善と正義を優先させる決断力を持って、すべてに当たられました。

「老年の誉れは長寿にあるのではなく、汚れのない生涯こそ長寿である。神に喜ばれている人がいた。彼は神から愛され、天に移された。彼は短い間に完成され、長寿を満たした」

(知恵の書4・8-13)。

岸先生の思い出

松本耿郎 教授

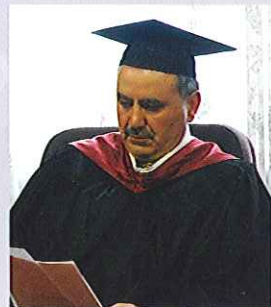


私は英知大学に奉職するまで神父さんという種類の人々と深くお付き合いする機会がなかった。以前、奉仕活動などで神父さんたちと一緒に仕事をしたことがある。しかし、岸先生ほど深いお付き合いをした神父さんはいない。特に奉職の初めから、大学院を設立するにあたって岸先生と一緒に仕事をしたので、岸先生の人柄をよく知ることができた。たいへん楽天的な方で、万事によい面を考慮し、否定的な面は努めて考えないようにしておられた。

この点は私とおおいに違うところだった。私は楽天的な面は岸先生と似ているが、常に懐疑的である。これはやはり信仰の有無の問題に帰着することかもしれない。このためか岸先生と意見が対立することもあった。しかし、私は自分の意見に固執しないタイプなので最後は岸先生にお任せしていた。こうして英知大学の大学院ができたのである。一重に岸先生の強いリーダーシップがあればこそこの大学院ができたのである。

岸先生と最後にお会いしたのは阪大病院に入院される前、今年の一月のことだった。私の研究室を訪ねてくださった。とても痩せておられたが、まだお元気だった。それに岸先生は死ぬことなど少しも考えておられない様子だった。その時、岸先生から「英知大学を辞めないでくださいよ」といわれたことが記憶に残っている。最後まで英知大学を気にかけておられた。今ごろは天国で英知大学を心配してくださっているであろう。

アンドレア・ボナツィ 教授



H I D E S H I QVI PRESBYTER IN ECCLESIA OSAKENSE FIDELITER MINISTRAVIT ATQVE IN VNIVESITATE
STVDIORVM SAPIENTIA EVANGELIVM TVVM VALDE NVNTIAVIT.

GRATIAS AGIMVS TIBI, DOMINE, QVIA HVMANI INGENII PRECLARVM
CVLTOREM NOBIS DARE DIGNATVS ES.

D. K I S H I INGENIVM SVVM PER ANNOS IMPIGRE EXERCENDO IN SCIENTIA PHILOSOPHICA AC THEOLOGICA
SANE PROFECIT.

NOSTRIS TEMPORIBVS IN MVNDO MATERIALI PRAESERTIM INVESTIGANDO ET SIBI SVBIICENDO, EGREGIOS
OBTINUIT HOMO SVCESSVS.

SEMPER TAMEN D. K I S H I PROFVNDIOREM VERITATEM QVAESIVIT ET INVENIT. INTELLIGENTIA ENIM NON
AD SOLA PHAENOMENA COARCTATVR, SED REALITATEM INTELLIGIBILEM CVM VERA CERTITVDINE ADIPISCI
VALET, ETIAMSI, EX SEQVELA PECCATI, EX PARTE OBSCVRATVR ET DEBILITATVR.

HVMANAE TANDEM PERSONAE INTELLECTVALIS NATVRA PER SAPIENTIAM PERFICITVR ET PERFICIENDA EST,
QVAE MENTEM HOMINIS AD VERA BONAQVE INQVIRENDA AC DILIGENDA SVAVITER ATTRAHIT, ET QVA
IMBVTVS HOMO PER VISIBILIA AD INVISIBILIA ADDVCITVR.

INCLINA, DOMINE, AVREAM TVAM AD PRECES NOSTRAS,
QVIBVS MISERICORDIAM TVAM SVPLICES DEPRECAMVR,
VT FAMVLVM TVVM KISHI HIDESHI, QVEM IN HOC SAECVLO
TVO POPVLO MISERICORDITER AGGREGASTI, IN PACIS AC LVICIS
REGIONE CONSTITVAS, ET SANCTORVM TVORVM CONCEDAS ESSE
CONSORTEM.

NOS BENEDICITE PATER CAELESTIS VT, D. K I S H I EXEMPLO CONFORTATI, GRAVISSIMVM EDVCATIONIS
MANDATVM PERFICERE POSSVMVS. AMEN.

A. Bonazzi
Religionum Scientiae Decanus
dedicavit

XVI IVN. MMVI

「電話に始まり電話に終わった巡り会い」

五野井隆史 教授



先生から最初の電話を頂いたのは、二〇〇三年四月一九日朝九時頃で、大学院への出講とI氏の学位論文作成指導についてであった。初めてお会いしたのは、一九九五年九月二十五日、京都の国際日本文化研究センターで開かれた研究会であった。先生は「賀川豊彦におけるキリスト教」について講演された。その時取ったメモが今机の上にある。私は翌日発表し、休憩時に論文が印刷されたら欲しいと声をかけられ、自分の大学に来ないかと誘いを受けた。英知大学の名はその時知った。

退職したばかりの私は一年充電する積もりでいたが、即座に快諾し秋から思いもよらぬ関西通いが始まった。幸いにも研究室は先生の隣室を宛がわれ、折にふれ大学創建時とその後校史、将来像について親しく窺い、優れた行政手腕の一端を垣間見ることができた。学者としての幅広い識見と学問に対する厳しさは学位審査において発揮され、私は自らの甘さを痛感した。日本人学生の入学減少と留学生が増加する現状に心を痛めておられた先生は、せめて大学院だけでも生き残り日本に唯一つしかない宗教学研究科の永続を願っておられた。

今年の元旦に、先生から電話を頂いた。T君の学位論文審査の副査に加えて欲しいと。少々咳き込み、暮れから風邪気味とお言葉であった。これが先生との最後の会話であった。先生の御霊がいつも安らかでありますように。



黎明期の英知大学と岸先生の思い出

沼波義彦 助教授

岸先生と初めてお会いしたのは40年前、先生が30歳代の頃である。当時は教室棟一棟のみ。今のセミナーハウスに10人程の若い神父さんが住み、現在の学生寮は学生のシスターで満室。そこから毎朝、403教室でのミサに通う若いシスター達が草むらで蛇に逢い悲鳴がしょっちゅう聞こえた。

創立者の田口枢機卿(当時司教)は毎週、自ら講義。309大教室は入りきれない程に。「これからはシスターや信徒が福音を述べ伝える時代になる。この為に英知大学は創立された。」校名はソフィアを上智大学が使用しているのでラテン語のサビエンチアとし、日本語訳を金田一先生など著名な国語学者達に諮問したところ、これからの日本語では『英知』と訳されるとの事。創立者から直接聞いた大学設立・校名決定の秘話である。

当時は学生運動が盛んな時代で、他校からよくピラを配りに来たが、自分の大学と校名の由来に誇りを感じる本学学生数十人が校章を付けた学生服姿で取り囲むと、さしもの覆面ヘルメット集団も走って逃げ去った。他校の問題に巻き込まれないよう学生達は大学側と一致協力し、必死に大学を守ったのである。創立まもない大学の存亡に繋がりがねない激動期に創立者を継ぎ岸先生は第2代学長に就任。学生とも敬語で話し高圧的なところなど全く無く、学生の話は何時間でも聴く学生に慕われる良き師であった。しかし黒一色で針金の如く太かった髪は、学長就任後4年もせず真っ白に。皆、ご心労に心を痛めた。

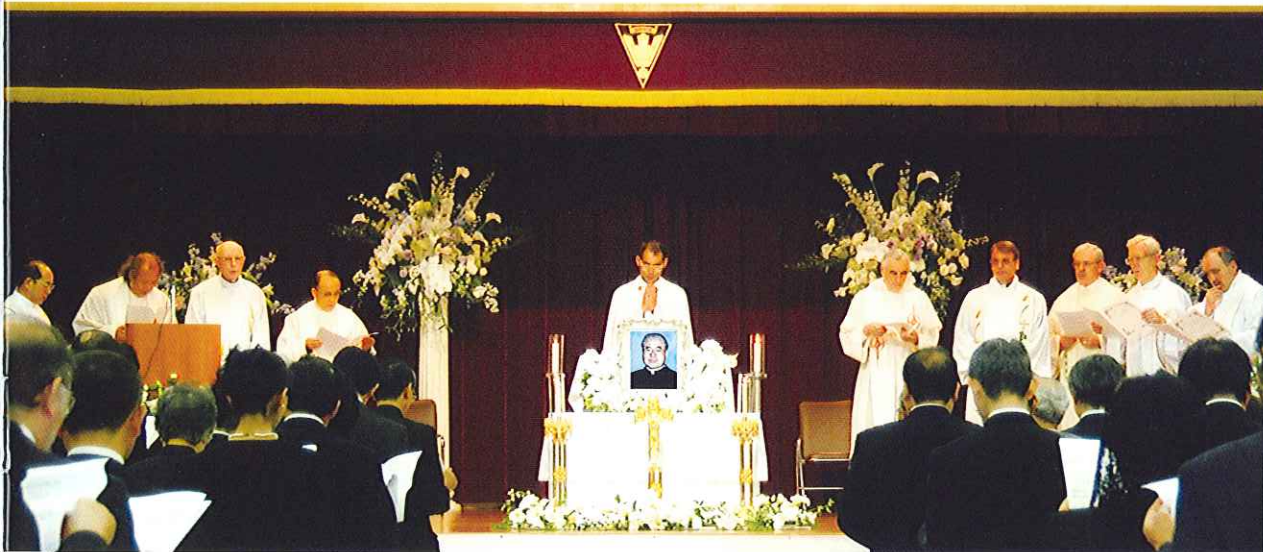
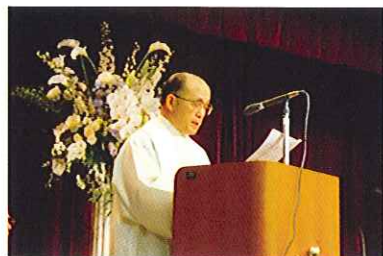
それから40年、岸先生のご逝去と共に英知大学の一時代が終わったと痛感するこの頃である。

大学葬

故アウグスチヌス岸 英司神父様は去る5月25日に79年の御生涯を閉じて、天にお帰りになった。それは主の昇天の祭日で神父様の司祭叙階45周年にも当たる日でもあった。去る1月からの長い闘病のご生活の間、心身のお苦しみを捧げて来られて、この意義深い日に、主の御許に帰られた神父様は、今はこの世の重荷を全て主の御許に下ろし救いの完成である天上の永遠の平安と喜びの内にここに集う私達を見守っておられる事と思う。

神父様のご経歴等は皆様既にご承知のことで、わたくしから改めて申し述べる筈もないが、今ここに共に故人をお偲ぶするために、簡単に思い起こして見たいと思う。神父様は、四国香川県にお生まれになった。司祭職を志して東京神学校の哲学院に入られ2年間在学された後、カナダのモントリオール大学に留学された。そして34歳で司祭に叙階され、続けて神学を研究されて神学博士号をお取りになって帰国された。それからは故田口大司教様の秘書として6年間教区事務局において大阪教区の為に重要な役割を果たされた。その後、田口大司教様の後を受けて第二代英知大学学長に就任された。それからの学長としての目覚ましいお働きについては大学関係者の皆様は、直接間接に良く御存知の事だ。神父様の10年にわたる学長職の間に大学は着実に発展し、体制も教育内容も目覚ましく充実して、英知大学は宗教教育と国際性を特色とするカトリック大学として知名度も高まって行った。そして大学院も開設されて神父様はご自身その中核となって、その発展に尽力して来られた。英知大学は、今は立派な施設を数々擁して美しい学園となっているが、その殆どの施設建物は岸神父様の構想と設計、そして建設の為のご尽力によって完成して行ったものである。神父様は、大学の御仕事の他にこれまで幾つかの教会の主任司祭としても長年尽力されたが、当初から終始大学の教授、そして理事後には常務理事として、身と心は片時も英知大学から離れた事はなく、大学の経営と教育に心血を注いでこられた。そして晩年更に5年間学長として再び大学の困難な時期に要望されて再び咲き大学の復興に尽力された。そして最後まで大学を思い、大学の為に働き、大学に再び戻りたいとの熱い思いを持ち続けたまま、遂に力尽きて、世を去る事となられたのである。英知大学への神父様のこれほどの熱情は、大学揺籃期からの関わりを通して、手塩に掛けた我が子に対する思いに似た物があつた為としか考えられない。この様に大学の為、教会の為に尽くされた岸神父様に私達は心からの感謝と尊敬と兄弟的愛をお捧げし、その生涯を通して神の栄光の為に働いて来られた神父様に、心一つにして祈りたいと思う。

(傘木澄男元学長のお言葉から)



わたしは復活であり、いのちである。わたしを信じる者は、死んでも生きる。(ヨハネによる福音11.25)

＋主の平和

故アウグスチヌス 岸 英司名誉教授の大学葬および告別式に際しましてはおいしい中をご参列頂き有難うございます。
みなさまの熱いお祈りによって故人は主のうちに安らぎを得ていることと信じております。

2006年6月18日 理事長 レオ池長 潤

- 1967年5月 中世哲学学会員
- 1967年10月 日本基督教学会員
- 1967年(1月11日) 発表「聖トマスにおける神の超越と内在」
中世哲学会第16回総会・大会、於、同志社大学
- 1970年10月 現代における宗教の役割研究会議(発起人、研究会員、理事)1期
- 1972年1月 日本テイヤール研究会員
- 1973年4月 比較思想学会会員
- 1977年10月 日本カトリック教育学会理事、常任理事
- 1986年4月 賀川豊彦学会会員、理事
- 1986年4月 比較文学学会会員
- 1988年4月 日本宗教学会会員
- 1988年6月4日 発表「ビュール・テイヤール・ド・シャルダンと賀川豊彦「宇宙的宗教思想をめぐって」
比較思想学会創立15周年記念大会、於、上智大学
- 1989年5月 日本カトリック神学会発起人、会員、評議員(1期)
発表「トマス・アキナス宗教論の現代的意義—S.C.G.L.1を中心として—」
- 1989年9月15日 日本宗教学会第48回学術大会、於、頤協大学
発表「鈴木大拙における靈性的自覚についてのカトリック神学的考察」
- 1990年9月29日 日本宗教学会第49回学術大会特別部会「鈴木大拙における宗教研究」、於、大谷大学
- 1991年5月7日 講演「日本文化の接点としてのカトリック大学」
日本カトリック大学連盟キリスト教文化研究所連絡会議、於、神戸海星女子学院大学
- 1991年7月6日 記念講演「宇宙思想家としての賀川豊彦」、第7回賀川豊彦学会
- 1991年9月11日 講演「キリスト教思想と日本人」、南山大学キリスト教研究会、於、南山大学
- 1991年11月2日 講演「鈴木大拙とトミズム—日本文化史の一断面—」
12大学キリスト教文化研究所研究会、於、清泉女子大学
- 1991年11月22日 発表「ビュール・テイヤール・ド・シャルダンの神秘主義」、日本宗教学会第50回学術大会、於、早稲田大学
- 1993年5月13日 記念講演「永遠のあこがれ—東と西—」
第41回キャプテン・ド・ガウン式典、於、ノートルダム清心女子大学
- 1993年12月 NHK教育テレビこころの時代「宇宙の神・人の神」放映
- 1994年9月10日 発表「トマス・アキナスにおける神の認識—mensをめぐって—」
日本宗教学会第53回学術大会、於、立正大学
- 1995年3月8日 記念講演「人生の意味」、第43回フッド授与式、於、ノートルダム清心女子大学
- 1995年9月 発表「諸宗教の神学形成に向けて」、日本カトリック神学会第7回学術大会、於、フランシスコ会神学院
- 1995年10月10日 発表「テイヤール・ド・シャルダンにおけるキリスト教—諸宗教との関連において—」
日本基督教学会第43回学術大会、於、南山大学
- 1996年9月21日 発表「トマス・アキナスにおける分離された魂の認識について」
日本宗教学会第55回学術大会、於、国学院大学
- 1996年9月24日 発表「賀川豊彦における神—進化論と神秘主義—」
日本カトリック神学会第8回学術大会、於、英知大学
- 1996年12月14日 特別講演「生と死をめぐって」、第65回参九会総会、於、大阪大学耳鼻咽喉科
- 1997年7月5日 特別講演「賀川豊彦宗教思想の現代的意義」、於、賀川豊彦学会(東京)
- 2002年11月21日 発表「宗教と文化」第24回世界連邦平和促進全国宗教者東京大会、於、増上寺・光圀殿
- 2003年3月27日 発表「諸宗教についての神学的考察—自然と超自然をキーワードとして—」
日本基督教学会近畿支部総会大会、於、松蔭女子学院大学
- 2005年3月 発表「啓示と自然—賀川豊彦の場合」日本基督教学会近畿支部大会、於、英知大学
- 2005年5月28日 基調講演「徳島の生んだ世界的思想家—賀川豊彦の自然学—」、於、鳴門市賀川豊彦記念館、年次総会

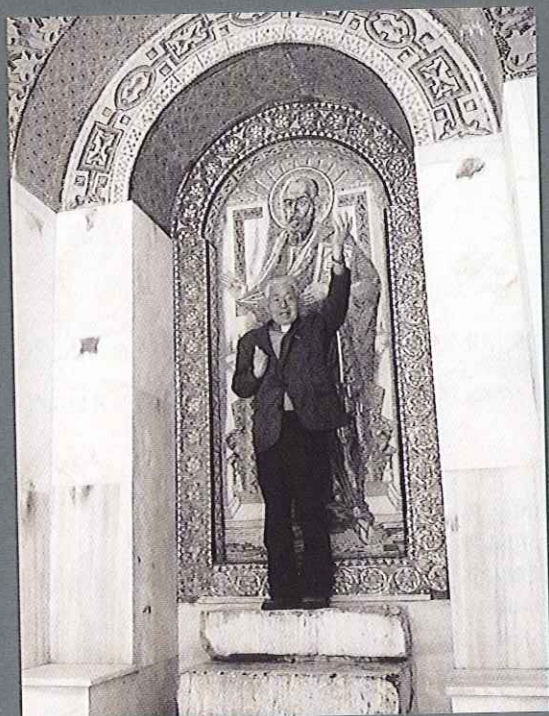
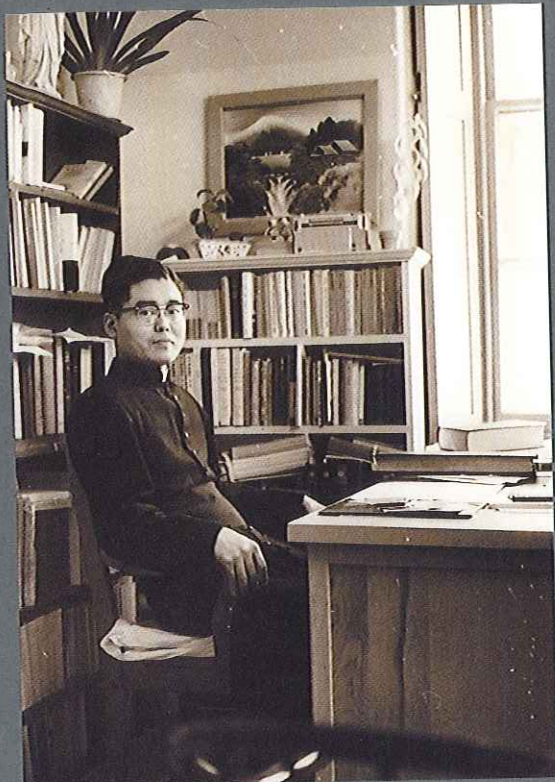


聖トマスに従うと神は知られざるものである。
 神を名付けることは出来ない。
 神は如何なる名称もこえている。
 不言である。
 無名が神の唯一の名であるとされている。
 著者はこれに閃聯（カンレン）して老子の
 次のことばを引用する。

名ノ名ヅク可キハ常名ニ非ズ
 無名ハ天地ノ始メ
 有名ハ万物ノ母
 道ハ常ニ無名

そして著者は、名をもたないこと、
 無名ということが西洋思想においても
 絶対者の第一の特長であることを指摘する。

『神思想とトマス・アキナス』岸 前書き より抜粋





英知通信第95 岸先生追悼号発行にあたり、寄稿いただきました 歴代学長をはじめ先生方、写真、資料などをお寄せいただきました皆様に心より御礼申し上げます。

なお、寄稿いただいた追悼文は原稿をそのまま掲載させていただきました。

編 集

編集長 田中 功
発行者 小田武彦
発行所 英知大学 〒661-8530兵庫県尼崎市若王寺2丁目18-1
06-6491-5000 (代)
EMAIL info@sapientia.ac.jp
URL http://www.sapientia.ac.jp/

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写(コピー)、複製、磁気や光記録媒体あるいは全ての媒体への入力をお断りします。